［令和３年度 学校自己評価］　　　　　　**達成状況評価シート㊕**

めざす子ども像

【自ら学び、学び合い、
高まる子　】

- **学習のルールを身につけ、進んで学習に取り組める子**
- **自他の考えを伝え、聴き合える子**

子どもの課題

①チャイムで授業を開始することについては、昨年度末には課題にはなっていないが、基本的な姿勢であるので評価項目とする。
②友だちの意見や考えに関心が向いていない子がいる。
③友だちの話を聴いたり、聴き出したりする姿はあまり見られない。
④思考力・判断力・表現力が十分とは言えない。
⑤自分の考えを表現する事に対して消極的である。
⑥自分の考えを的確に表現できない。

注　項目の番号は、　子どもの課題　主な取組内容　達成状況　で対応している

学期	主な取組内容	達成状況 分析・考察
３学期	２学期の内容を継続する。 ①チャイム席とチャイムで授業を開始することを意識して進める。 ②③④⑤⑥子どもをつなげる働きかけを教科や子どもの様子に応じて工夫して行う。 ④⑥考えを深める働きかけを行う。 ②③④⑤⑥学びの実感を持たせる授業を行う。 「主体的な学び」を目指すために、ふり返りのこつを子どもたちに示す。 ③④⑤⑥聴き方、話し方の段階的な指導 ③④⑤⑥国語の「話す・聞く」単元でQRコードの動画を見せ、話し方・聴き方のモデルを示す。 ②③④⑤⑥子どもたちに伝えようとする意識をもたせる。（誰につたえたいか。聴き手を見て話すなど） ④教師は発言者や聞き手に「なぜそう言ったのかな」「どこが同じなのかな」など問い返しを行う。 ②③④⑤⑥みえスタ・学調の結果から考察した取組をすすめる。 ②③④⑤⑥研究授業を通して考えた取組（「Are　You　Ready？シート」）を進める。 ①　Cと答えた少数児童に個別に支援をするとともに、出来ているこどもをほめ全体に広げていく。 ②　③④⑤⑥話す・聴く単元の動画やCDに加え、教師も話し方・聴き方のモデルとなる。	①　チャイム席について、意識が高まり、おおむね達成できた。（アンケート・観察）めざす子ども像を教室に掲示し、毎学期ふりかえりを行ってきたことが教師・児童ともに意識向上につながった。「座った状態でチャイムを聞く」と「チャイムで席に着く」の認識の差があったため、次年度は統一する。 ②③④⑤⑥「話す・聴く」は教師・児童ともに取り組むことがで　きた。自分の考えを表現する、友だちの考えを聴くことはできているが、相手の考えを聴きだす、相手の考えに寄り添って聴くところには至っていない。（アンケート・観察）ただ、ペア・グループ活動を設定するだけでなく、子ども同士をつなぐ教師の働きかけが必要である。
２学期	①チャイム席とチャイムで授業を開始することを意識して進める。 ②③④子どもをつなげる働きかけを教科や子どもの様子に応じて工夫して行う。　　④考えを深める働きかけを行う。 ②③④学びの実感を持たせる授業を行う。 ・「主体的な学び」を目指すために、ふり返りのこつを子どもたちに示す。 ③④⑤⑥聴き方、話し方の段階的な指導 ③④⑤⑥国語の「話す・聞く」単元でQRコードの動画を見せ、話し方・聴き方のモデルを示す。 ②③④⑤⑥子どもたちに伝えようとする意識をもたせる。（誰につたえたいか。聴き手を見て話すなど） ④教師は発言者や聞き手に「なぜそう言ったのかな」「どこが同じなのかな」など問い返しを行う。 ②③④みえスタ・学調の結果から考察した取組をすすめる。 ②③④研究授業を通して考えた取組（「Are　You　Ready　シート」）を進める。	①児童のふりかえりを全体でみるとA評価の割合が高くなっていることから、チャイム席の意識は高まったといえる。Cと答えた少数児童に個別支援が必要。 ②③④⑤⑥　伝えることに苦手意識をもつ子どもは一定割合いることから、少人数での話し方・聴き方についても評価していってはどうか。 ③④⑤⑥聴き方・話し方の段階的な指導は、「話す人を見る」「反応しながら聴く」「教師の話し方をモデルにする」などを行っている。中学年は、小グループでの話し合い内ではできているが、クラス全体にまでは至っていない。高学年は、モデル動画などを参考に、国語の単元では学習するが、同じ領域内で系統性をもってつなげていくところまで至っていない。 ④⑤⑥5年生は自分に合った表現の仕方ができたためCと答えた児童が減った。
１学期	①子どもが学習に取り組めるように「学習のやくそく」を教師が意識して取り組む。 ②③④津市教委発行「子どもたちが「つながり、考えを深める」授業づくりをめざして」の実践や主体的・対話的で深い学びの視点にたった授業づくりを行う。 ②③④⑤⑥子どもをつなげる働きかけを行う。④考えを深める働きかけを行う。　②③④学びの実感を持たせる授業を行う。	①チャイム席（チャイムが鳴る前に着席している）については教師の働きかけだけでなく、子どもたち同士の声掛けによって行動できるようになってきている。チャイムと同時に授業を開始することについては、児童アンケートの結果では、高学年になるに従いできていないと考える児童が増えている。（アンケート・観察） ②③④⑤⑥クラス全体に向けて自分の考えを発表しにくい子もいることから、ペア・グループ学習の設定はされているが、アンケートの結果や教員の観察から、少人数であっても、どのように伝えたり聴いたりしたらよいか分からない子どもがいることが考えられる。また、公開授業からも反応して聴くなどの聴き方・話し方の指導が必要であると考えられた。各学年において年間を見通した段階的な指導が必要である。（アンケート・観察） ④高学年のアンケート結果や児童の様子から、授業のまとめの段階では、みんなの前で発表することだけでなく、ペアやグループの中で話したり、ノートに書いたりするなど様々な表現の仕方で考えをまとめることが必要だと考えられる。それに伴って、評価基準を修正する。

［令和３年度 学校自己評価］　　　　　　　　**達成状況評価シート**　㊕

めざす子ども像

【思いやりのある子】

- 友だちや周りの人に感謝し、思いやりのある言動ができる子
- 自らあいさつができ、「ありがとう」「ごめんなさい」が素直に言える子

↑

子どもの課題

①一面的な見方をして、友だちに対し、決めつけて接する場面が見られる。
②相手の気もちを考えたり、自分の気もちを伝えたりすることができず、トラブルになる場面が見られる。
③相手を思いやる気持ちが少ない児童がいる。
④自己肯定感が低い子どもがいる。
⑤決まった相手に対してしかあいさつができない。
⑥トイレのスリッパを一人一人が意識してそろえることができていない。

注
　項目の番号は、　子どもの課題　主な取組内容　達成状況　で対応している。

学期	主な取組内容	達成状況 分析・考察
３学期	基本的に２学期の取り組みを継続していく。 ①②③④生活を語る会や特別支援教育研修での個別の指導計画検討で１学期の様子をふりかえり、それらを踏まえて２学期の学級づくりを進める。 ②トラブルが起こったときや、よく起こるトラブルを想定し、そのときにどのような言動をとるとよいか考えさせる機会を作る。 ②子どもたちの間で起こったトラブルについては、より丁寧な聞き取りを心掛け、冷静に状況判断をし、効果的な指導をするために、早い段階で学年団に相談をすることで共有を図り、教師同士もつながりをもち、連携して取り組んでいく。 ①②③④１人１人の思いを聴き出し、互いの思いを共有させながら、子ども同士をつなぐ働きかけを行う。 ①②③④相手を知る活動をするなどして互いのことをよく知り、「いいところさがし」などよさを認め合う活動を行う。 ①②③④指導者自身が、子どもたちをほめる・認める言葉がけや、欠点ととらえられがちなことについて、視点を変えてその中によさがあることに気づかせる言葉がけを積極的に行う。 ④児童会による異学年との交流イベントや卒業に関する様々な行事等の中で子どもたち同士がつながる機会を作る。⑤学校内でのあいさつの充実を図るために、あいさつボランティアを中心とした校内のあいさつ運動を継続的に実施する。⑥「思いやりの輪をひろげる～トイレの神様～」の取組を進める。	①②③④児童アンケート・教員の観察結果から、どの項目もＢ以上の評価が９０％近くとなっており、日々の地道な取り組みが成果として表れていることがうかがえる。ただし、児童アンケートからはＣをつけた子どもが一定数いることが分かる。この子どもは固定されているのかどうかも含め、実態をつかむために丁寧な聞き取りをする必要がある。そして、その内容によっては、その子だけの課題にするのはなく、教員自身も含め、その子をそうさせている周りの課題としてとらえ、自分たちが行っている仲間づくりを真摯に見直さなくてはいけない。また、家庭との連携も必要となってくるであろう。そして、そのことは担任１人だけで抱え込むのではなく、学年で報告・相談をし、安心して過ごせる学級づくり、学校づくりに取り組んでいくことでよりよい取り組みになっていくと考える。 ④児童会による交流イベントは今学期もできない見込みであるが、他学年を思いやりながら計画を立て準備を進めている。アンケート結果では、子ども教師共に評価が上がった。授業や生活面での教師の支援により子どもたちが落ち着き、周囲に目が行くようになったと考えられる。 ⑤あいさつボランティアの取組を行うことであいさつを積極的に頑張ろうとする児童が見られるようになった。次年度以降も継続して取り組んでいくことで学校全体としてあいさつへの意識が高まっていくと考えられる。（観察） ⑥学年によって差が見られたため、発達段階に応じて取り組みを工夫する必要があった。しかしながら、積極的にスリッパを整えようとする姿も見られたため、そのような姿を紹介していくことで改善されていくのではと考えられる。
２学期	①②③④生活を語る会や特別支援教育研修での個別の指導計画検討で１学期の様子をふりかえり、それらを踏まえて２学期の学級づくりを進める。 ②トラブルが起こったときや、よく起こるトラブルを想定し、そのときにどのような言動をとるとよいか考えさせる機会を作る。 ①②③④１人１人の思いを聴き出し、互いの思いを共有させながら、子ども同士をつなぐ働きかけを行う。 ①②③④相手を知る活動をするなどして互いのことをよく知り、「いいところさがし」などよさを認め合う活動を行う。 ①②③④指導者自身が、子どもたちをほめる・認める言葉がけや、欠点ととらえられがちなことについて、視点を変えてその中によさがあることに気づかせる言葉がけを積極的に行う。 ④児童会による異学年との交流イベントを行う。 ⑤学校の中だけでなく、学校外でも積極的にあいさつができるような取り組みを企画する。 ⑥「思いやりの輪をひろげる～トイレの神様～」の取組を進める。	①②③④子どもたちの評価の増減は、子どもたちが学級に慣れ、遠慮がなくなり、それ故のトラブル等が起こり、思いやりにかけた言動が出てきていることが考えられる。また、教員は、トラブルが発生したときの自己の取り組みがうまく働かなかったという内省から、評価の数値の増減が見られたのではないかと思われる。 ⑤あいさつボランティアを中心に、あいさつへの意識が高まってきている。特に低学年はあいさつできる児童が増えてきている。しかし、学年が上がるにつれてあいさつする児童は少なくなってきている。⑥徐々にスリッパが揃うようになってきている。④コロナの流行による活動の制限から、児童会による不特定多数のイベントを行うことができなかった。しかし、児童会の立会演説会や１年と６年の交流会など、異学年での交流も少しは行うことができた。アンケート結果からは子ども教師共に評価が下がったことがわかる。普段通りの生活ができなかったことにより、子どもたちのつながり合う機会の減少によるものだと考えられる。
１学期	①②③④ ・１人１人の思いを聴き出し、互いの思いを共有させながら、子ども同士をつなぐ働きかけを行う。 ・互いのことをよく知り、よさを認め合う活動を行う。 ・トラブルが起こったときや、よく起こるトラブルを想定し、そのときにどのような言動をとるとよいか考えさせる機会を作る。 ・児童会による児童会週間で異学年との交流を行う。 ・中庭の開放をなかよし学年で行う。 ⑤月２回のあいさつ運動の実施。 各学年からボランティアを募集し、一人一人のあいさつへの意識を高める。 ⑥トイレに足型を貼ることで、意識付けを行う。	①子どもの間でこれまでのことからの思い込みや決めつけによる言動があり、互いのことを十分理解しているとは言えない現状があると思われる。（記録）②③授業のふりかえり等から子どもたちは、相手の気持ちを考えて行動することが大切であると考えていることが分かる。しかし、アンケートの結果から意識はしていても行動が伴わない子どもがいると考えられる。（アンケート・観察記録） ④アンケート結果から学年が上がるにつれ、自己肯定感が低い子どもが多くなる傾向が見られる。（アンケート）③④異学年との交流イベントや中庭の開放では、高学年が低学年を思いやる姿や共に楽しもうとする姿が見られた。（観察）　参加人数　５４０　人⑤・あいさつボランティアに　１８０人の参加があったことからあいさつをひろげたいと考えている子が多い。　・あいさつボランティアを募集したことにより、学校としてあいさつに取り組む形を作ることができた。⑥「思いやりの輪をひろげる～トイレの神様～」 トイレのスリッパの並べ方を青・黄・赤のシールで表すことで、自分の行動をふりかえり、次の人の事を考えてスリッパをそろえようと意識する子が増えてきていると考える。

［令和３年度　学校自己評価］

達成状況評価シート㊍

めざす子どもの姿

【元気な子】

・進んで運動し、健康や食に気をつけて生活できる子

子どもの課題

①休み時間に、晴れていても教室で過ごす子がいる。
②規則正しい生活を送れていない子がいる。
③給食の残食がある。

注　項目の番号は、　子どもの課題　主な取組内容　達成状況　で対応している。

学期	主な取組内容	達成状況 分析・考察
３学期	①体育委員会が主となり、異学年で交流できる外遊びの企画や放送や張り紙で遊び紹介などをしていく。 ①　引き続き、各クラスで外遊びの声かけをしていく。 ②規則正しい生活を送ることの必要性を伝えていくとともに、生活が乱れている傾向にある児童やその家庭には、担任を中心として個別に声をかけていく。 ③給食ふりかえり週間の取り組みを継続していく。アンケート結果を活用し、給食委員会を通じて啓発活動を行う。	①　体育委員会が企画した鬼ごっこ週間には、どのクラスも９割近くの児童が参加した。体育委員会による企画であり、担任の声かけもあったうえに、１月に「まん延防止等重点措置」が適応され、教室での休み時間の過ごし方に新型コロナ感染予防対策を講じたために、外遊びをする児童が増えている様子が見られる。 ②　家庭訪問や電話で保護者に声かけするだけでなく、担任外の教員が声かけをしたり、スクールカウンセラーなどと協力したりしたことで、徐々にではあるが、生活の乱れが改善傾向にある児童もいる。引き続き、担任を中心として個別に対応をしていく。 ③　残食をしないように食べようとする児童が増え、１学期に比べて１クラス当たりの残食の量が減ってきている。（アンケート・観察）給食ふりかえり週間の取組だけでなく、食教育の指導、黙食、給食時間の確保などの取り組みが有効であったと考えられる。一部、給食を残してしまう児童もいるため、継続していく必要がある。
２学期	①引き続き、各クラスで外遊びの声かけをするとともに、学級遊びの日を設けていく。 ①体育委員会が主となって、外遊びをする子どもが増えるような企画をしていく。 ②規則正しい生活を送ることの必要性を伝えていく。 ②生活習慣チェックカードを効果的に活用しながら各家庭に注意喚起をしていく。 ③給食委員会が主となり残食ゼロにつながる企画を考えていく。 ③食教育や給食ふりかえりカードをとおして、バランスよく食べることの大切さを意識させていく。	①教師が声をかけると、進んで外で遊ぶ姿が見られる。中には、クラス遊びで全員外に行くクラスもある。しかし、寒くなってきて外で遊びたがらない児童が増えてきている状況にある。 ①　おしゃべりや読書を楽しむなど、室内で過ごしたい児童もいる。 ②生活習慣チェックカードに取り組むことにより、各家庭と連携して望ましい生活習慣の確立に取り組むことができた。中には、コロナウィルス感染症による休校期間中で生活リズムを崩した児童もいたが、夜更かしや遅刻等、規則正しい生活を送ることができていない児童は１学期とほとんど変わっていない現状がある。 ③どの学年も１学期と比べると全体的に残菜が減っている。しかし、給食を残す児童は１学期と変わらず給食を残してしまう傾向がある。
１学期	①各クラスで外遊びの声かけをしたり、学級遊びの日を設けたりして、積極的に外遊びをする児童が増えるように努めていく。 ①「体力テストがんばろう週間」として体育委員が各運動のコツを教える練習の場を作り休み時間に自由に使えるようにした。 ②教師の声かけ、保健だよりや学校だよりにより、規則正しい生活を送ることの必要性を伝えていき、子どもや各家庭に注意喚起をしていく。 ③給食委員会による残食ゼロキャンペーンを行い、クラスごとに給食後のワゴンをチェックして、残食ゼロを達成したクラスを表彰していく。	①学級遊びの機会に外で遊ぶ児童は多い。しかし、主体的に外遊びをしようとする児童はまだまだ少ない様子である。(アンケート・観察) ①「体力テストがんばろう週間」への取組参加人数（　２２０　人）が多いことからがんばろうとする気持ちが強いことが分かった。 ②夜更かしや遅刻等、規則正しい生活を送ることができていない児童が見受けられる。（観察） ③残食をしないように頑張って食べようとする姿勢が見られたが、一部の児童は苦手な食べ物を残したり、手をつけることができなかったりした。このことから、バランスのよい食事を摂ることも重要であると考える。(振り返りカード・記録)